

▶ 2024.1.6(土)

- A : 「たとえば, ”流砂の憂鬱” など…  
事物を擬人化すると”現代詩”になるんだよ。」
- B : 「なるほど!  
”葉缶の怒り”とか, “トマトの嘆き”とか…」
- A : 「う～ん, もう少しシュールでないと…」
- B : 「シュールか!  
”茫洋の鬱屈”とか?」
- A : 「うん, いい, それ, いい!  
それから, 異質なものの併存も現代詩だよ。  
たとえば, ”太陽の光が燦々と流転する間”とか。」
- B : 「そっか,  
真っ白な黒蝶とか。」
- A : 「う～ん, もう少しシュールでないと…」
- B : 「シュールか!  
”蒙昧な明晰性”とか”饒舌な沈黙”とか?」
- A : 「そう, そう, それ, いい!  
実にいい, 現代詩そのものだ!」
- B : 「渺々たる実存, 呵々たる鬱積, 透徹する過失, …  
なんでも作れそうな…」
- A : 「そうなんです。  
現代詩は, 現代に生きる人間の根元にある性であるゆえに,  
万人に与えられた感性なのです。」
- 生徒A子 : 「ふ～ん,  
現代詩って, だれにでも作れるのか…」
- A : 「そうなんです。  
あなたも, ひとつ作ってごらん下さい。」
- 生徒A子 : 「そだね, では…  
…」
- A : 「え?  
何も書いてないでしょうが。」
- B : 「あなたねえ,  
ほんとに, 現代詩って分かっているの?」
- A : 「…」
- B : 「無である有って, 最高の現代詩なんだよ。」
- A : 「はあ…」

ここまでくると、禅の世界になります。  
われわれ修行のできない人にはたどりつけない世界です。

はい、

生徒A子：「あのねえ…

ただ、思いつかなかったから、  
何も書かなかっただけなんだよ。」

B：「…」

**じゃんじゃん！**